

## 歴史地理学会会報第一〇〇号を記念して

菊地利夫

### 一、日本歴史地理学研究会から歴史地理学会へ

一九五八年四月二十九日、日本歴史地理学研究会が創立された。第一回の総会・大会は日本大学において開かれた。会員百数十名であった。これが今日の歴史地理学会の前身である。そして一九七八年、歴史地理学会は紀要を創立二十周年記念特別号として発行した。創立以来、紀要は毎年テーマ別特集として二十冊を発行したのである。この年十一月には、歴史地理学会会報の第一〇〇号を発行することになる。学会創立から年ごとに数回づつ発行してきた会報が第一〇〇号となったのである。ふりかえってみれば、長年月にわたってよくもつづいてきたものである。

明治以来、歴史地理学の研究会や学会はいくつも創立されてはまもなく消滅した。その中でも、一八九九年に日本歴史地理研究会（後に日本歴史地理学会と改称）がもつともながくつづいた。しかし一九二二年九月まで発行しつづけた雑誌「歴史地理」は停止され、学会活動は弱まった。この年に関東大震災が発生したからである。しかしその後も歴史地理学の研究者は増加し、歴史地理学も発達しつづけてきた。

一九五〇年代は日本が第二次大戦の敗戦から立ちあがり、国民経済もどん底から上向きになり、学術文化も急速にもりあがってきた。日本における地理学が一まわりも大きくなった時期であった。そのため、日本地理学会について学会の組織・運営・構造が大きな問題となり、さまざまな改革がなされた。他方には新しい学会が続々と創立された。総合的学会として、人文地理学会や東北地理学会などであり、部門別地理学会として、日本歴史地理学研究会や日本地理教育学会や経済地理学会や政治地理学会などである。総合的学会は会員が多く、総会・大会はお祭りさわぎになりがちであるが、部門別地理学会はそれぞれの部門研究をよく深くほりさげることができるとし、隣接科学との学際的交流もできる。しかし会員がすくないから、学会を維持する会計が弱点となって消滅しやすい。一人の研究者の身になれば、三大総合的学会に入会してさらに得意とする部門別学会にも入会する。研究者の財布の中が苦しくなる。やむを得れば部門別学会は会計の面から学会を維持していくことがむずかしくなる。

それをわかつていても、日本歴史地理学研究会は出発した。数名の発起人がいくども会合して趣意書をつくり、これを日本中の歴史地理学研究者に配り、その中から本会の評議員として四十五名を推薦して第一回総会を開き、会則を承認して創立した。この日の大会に十三名の研究発表者があり、出席者は約八十名であった。この年の八月に会則にしたがつて常任委員八名を選出し、九月二十日に第一回常任委員会を茗溪会館において開き、常任委員長を互選し、常

任委員の会務分担をして、ようやく運営が軌道にのつた。顧問に故内田寛一先生、故古田良一先生と、現在の名誉会員の小牧実繁先生をいただき、当分の間は会長をおかず、会の総括責任者を常任委員長でまに合わせることにした。私が常任委員長となり、それから三期六ヶ年もこの状態のままであった。この理由は、建前では、学会でなくて研究会であり、しかも学閥・学派を問わずに民主的に運営するためであるとしたが、本音では、会員が何人になるか、会費はどれだけ集るかかわらないし、総合的学会からの圧迫も小さくはないし、いつ研究会が消滅するかという不安もあり、このような迷惑を会長となる人にわざわざすることができなかったからであった。研究会の事務所も臨時に拙宅において事務を進めた。それでもこの年の十一月二十九日に第一回例会を立教大学において開いた。それから例会はすでに九十数回もつづいている。これらの例会の発表者と、そのテーマは別に掲げられているが、これをみても、二十年間の蓄積した例会の研究発表の成果はいかに大きいものであるかはわかる。この第一回例会後の常任委員会に特記すべきことが決定された。それは日本歴史地理学研究会の事務所を立教大学地理学研究室におくことを庶務・会計担当の中田栄一さんが承諾したことである。それから七年後に中田さんは浅香常任委員長を直接補佐し、昭和四十九年四月より常任委員長となり、一九七八年まで、実に二十年間にわたって、庶務・会計を担当し、さらに会務全般の総括を引きうけることになるのである。このためには、私の場合もそうであったが、中田さんの場合も、常任委員の労力分担だけではまにあわず、御

令閨の御奉仕が頼りになったことが多いと推察される。

この機会を利用して深く御令閨に感謝を申しあげる。このころ藤岡謙二郎さんが「会員をどんどん増すから、しつかりやれ」と激励した。会員は年々二十数名ずつ増加した。会費の滞納はほとんどなかった。こうして紀要第一号が一九五八年四月に刊行された。同年六月十五日に会員通信第一号が全会員に配布された。一九六六年に日本歴史地理学研究会は「歴史地理学会」に改称された。これは会員から研究会ではなく学会にすべきであるという要望が強かったからである。一九七四年に「会員通信」の名をやめて「歴史地理学会会報」と改称して学会誌に発展した。さらに歴史地理学会の新体制がつくられた。そのために旧会則を廃して新会則が行われた。会員はすでに全国にわたり五百数十名にこえていた。このような歴史地理学会の発展は、初代会長の浅香幸雄さんが三期六ヶ年にわたって努力し、次に藤岡謙二郎さんが二代目の会長となり、次に米倉二郎さんが三代目の会長となつて歴史地理学会の発展に努力された。この間に二代目会長から中田栄一さんは常任委員長となり、歴史地理学会の確立、安定化するために数々の危機をきりぬけた。

## 二、歴史地理学会会報第一〇〇号になるまで

会報第一〇〇号といえはざつしりとした重量感がある。現在の会報は三十七頁の厚さであり、年六回の隔月刊である。その上に野集紀要二百数十頁を年一回づつ発行している。この二十年間に会員通信から会報になるまでの発展ぶりを頁数からふりかえってみよう。お

もな変化をとりあげると次のようになる。

会員通信第一号 一九五九年六月十五日発行より二頁 ガリ版。

会員通信第三号 一九五九年十二月十五日発行より四頁

会員通信第五号 一九六〇年五月二十日発行より八頁

会員通信第九号 一九六一年五月二十五日発行より十頁

会員通信第十二号 一九六二年一月三十日発行より十四頁 ガ

リ版からタイプ印刷に変更する。発行はこのころまで年五回が多かった。

会員通信第二十四号 一九六四年四月三十日発行、二十二頁

会員通信第三十四号 一九六六年五月二十日発行、十九頁 この

とき日本歴史地理学研究会を改称して歴史地理学会とし、巻頭に会長浅香幸雄さんからの改称趣旨と挨拶を掲載した。

歴史地理学会会報第七十四号 一九七四年五月十日発行、会員通信を改称して歴史地理学会会報とした。学会誌としての準備がはじまる。二十四頁となった。

歴史地理学会会報第七十九号 一九七五年五月発行。学会誌として三十七頁となった。

会員通信の頁数を増すことが、インフレによる印刷代、紙代の値上りや郵送料の値上げなどの経済的条件が悪化していく過程に進行した。少数の会員からの会費だけでは維持できそうもない情勢にたびたびおそわれた。常任委員会は窮余の一策として、一人づつ一万円を寄付しようかなどと、深刻な顔で相談したこともあった。会員通信と紀要の発行には、一にも金、二にも金、三にも金という状況であった。中田常任委員長は口を開けば予算項目の金額を節約・節

約をくりかえした。常任委員は運営努力として、交通費を出さず、

会議費を切りつめて涙ぐましい努力をして経済的危機をのりこえた。

なによりもありがたかったのは、会員の増加、会費の値上げがあつても会費の完納が行われて、会員の御協力は絶大であった。ことに

浅香会長は畠山財団からの研究助成金を二年おきにとりつけたことは、まさに干天に慈雨であった。しだいに紀要のバックナンバーの

売上げ高が増加した。畠山財団からの研究助成金は学会の経済的危機をのりこえるための運営基金として一時的に蓄積したこともあつ

た。会員からの要望として会員通信から学会誌に発展させることがしだいに強くなつてきた。インフレが強まる中で、会費の値上げを最小限にしながら、増頁を行い、内容改革するための予算化は容易

ではなかつた。そのころ故浅沼操博士の遺言によつて歴史地理学会に振興献金があつた。これが契機となつて歴史地理学会会報を学会誌として内容を充実させることができた。一九七五年の第七十九号からであった。記念として、山口守人さんが故浅沼博士の遺稿を整理してこの号に論説第一号として掲載した。

このために紀要編集の担当する常任委員の外に、会報編集担当の常任委員を新設した。この担当者の労働は大変だった。年六回の会報発行のために、一年中毎週一回は会合して発行の事務をとりあつかねばならなかつた。論説の原稿を集めたり、庶務・会計委員から会員への通信事項を集め、集会委員から例会の発表要旨と座長の所見を集め、これらを整理して印刷所に廻し、そして校正を行い、庶務・会計委員と会員へ発送手続きをして郵便局に持っていく。こ

の会合の日は常任委員長をはじめ、各会務分担の常任委員が集り、流れ作業のように一日中数時間もつづく。中田常任委員長はこれを二十年も独特の几帳面さでやり通した。一九七八年から常任委員長は専修大学の山崎謹哉さんにバトン・タッチされた。山崎常任委員長の新構想は新会則によって、それぞれの会務は運営委員数名を置いて学会の新事務所の専修大学において行われている。山崎常任委員長は例の生真面目さを發揮してこの会務を総括している。まず会合の数日前から会長と各常任委員や運営委員に密接に電話連絡をしておく。したがって常任委員長になったときから、途端に山崎さんのお宅の電話料金が何倍かに増加した。しかし学会はこの電話料金をさし上げていない。常任委員長は御令聞にどのように弁解なさっているのか、会長として心配の種である。

### 三、歴史地理学会会報の内容について

歴史地理学会は年一回の紀要の発行のほかに、さらに会員通信を年六回も何故に発行しているのか、紀要発行は、歴史地理学のさまざまな研究問題のうちからテーマ別の特集をして、その研究動向をさぐり、現在到達している水準を明らかにしてこれを一步前進させようとした。バラバラになつて各方面の問題を研究している歴史地理学界として必要なことであつた。したがって毎年の大会はテーマ別のシンポジウムと自由論題にわけて発表し、シンポジウム発表が中心となつてゐる紀要が発行された。これは一面の長所であつたが、他面には短所でもあつた。会員は自分が関心を持つてゐるテーマが

いつの大会のテーマとなり、紀要に発表できるのかという不満がある。いずれにしても、会員は年一回の大会発表と紀要とが学会とのつながりを持つただけである。

これに対して、年五十六回の例会が開かれる。例会は一―二名の発表者があり、出席者は三十数名で、その討議は長時間にわたるのが特色である。しかし出席者は東京とその近県の会員だけである。この例会発表を全国の会員に連絡しなければならない。さらに学会から会員への事務連絡もまた多く、これもできるだけ早く会員に通信しなければならぬ。そこで会員通信は例会発表と事務連絡を中心とする内容となつた。長年の間、会員通信は会員の論説などを発表する学会誌ではなかつた。しかし特色があつた。発表費を紙面を許すだけ大きくとり、これに当日の座長の所見をつけたことであつた。この所見の本来の意義は、当日の発表に対してどの部分か上に討議されたかを客観的に記録して会員に知らせることであつた。ところが所見という名から生じてきたと思われるが、その内容は討議の客観的雰囲気や記録からしないで、座長の個人的な批評や見解が強くおしだされてきた。これは当然の成り行きであるが、発表者からの苦情がしばしば出てくるようになった。この問題について意見はいろいろにわかれると思うが、討議の客観的記録が座長の個人的批評のいずれかにかたよることなく、両者に適切なバランスがなければ、例会の雰囲気を会員によく伝えることにはならぬだろう。

会員通信が会報に改まるころには、会員から新しい要請がしたい

に強くなってきた。紀要は大会発表をテーマとするというわけにはめられ、発表期日も固定されている。例会発表もあるが、これは講演である。さまざまの論題を論説として発表できる機会を拡大すべきであるという考え方である。これは会員がすでに五百数十名になった歴史地理学会としては当然のことである。いつまでも予算が許すかどうかの問題であると言っておられない。会報は当然のこととして学会誌に性格づけることに発展させなければならぬ。会報第七十九号から会報投稿規定をつくり、論説、研究ノート、短報、資料解説、文献紹介、会務報告などに改められた。しかし当分の間は論説を一つとして資料解説と文献紹介は書評として一括することになった。なにしろ会報というが、総頁数が三十七頁の薄いものだからである。今では論説の投稿が多くなり、年六回の会報ではさばききれなくなってきた。会報編集委員のしごとはますますふくれあがってきた。今や紀要と会報の発行回数をどうするか、予算分配を両者にいかにするか、紀要と会報は今後どのように学会活動の中に位置づけていくかが重要問題となってきた。

#### 四、歴史地理学会会報の諸問題

とにかく歴史地理学会は二十年もすぎるといろいろの問題がでてくる。学会の常任委員はそれぞれの会務にベテランである。中田栄一さんは庶務、会計と常任委員長を二十年間勤続である。現常任委員長長の山崎謹哉さんもやはり各種の常任委員と新常任委員長で二十年勤続者である。常任委員長は会報責任者となるのが慣例であるか

ら、その多忙は大変である。紀要編集の常任委員の責任者である山口恵一郎さんは二十巻に及ぶ紀要の大部分を編集・校正してきた。集會担当の常任委員の責任者の中島義一さんも長年月にわたって大会と例会をつかさどり、その発表者と例会・大会の場所を成立させてきた。よくぞこれらの常任委員の方々はその会務をやり通してきたと思う。会員はこれらの人々に感謝しながら、あまりにも頼りすぎている。今日ではこれらのの方々には自分の後継者づくりに熱心である。山崎常任委員長の新構想によるそれぞれの会務運営委員の実現は後継者づくりに役立つだろう。ベテランによる会務の安定化も大切であるが、運営の若返りが強く要請されている。とくに現代は、歴史地理学が大きく変わりつつある時代であることを展望すると、その動向に学会の体制が適応し、促進していくエネルギーを燃焼させることが必要であろう。新設ともいふべき庶務・会計の責任者でおる山田安彦さん、会計担当の松村祝男さん、紀要担当の菊池万雄さん、会報、集會担当の各委員などが登場してくれた。これらの方々は一層若い運営委員の人々とそれぞれの会務を進行させている。

なにをさておき、歴史地理学会は毎年一回発行の厚い紀要と年六回発行の会報とをいかに関係づけるかは、さし当って解決しなければならぬ重要問題であろう。会報には論説をふやしたいが、そうすれば分厚く頁数を増加することになるだろう。年六回発行という多忙な事務にいつまで耐えられるだろうか、年四回発行の季刊も考えられるだろう。学会誌と内容を充実させていくと、紀要のテーマ別

特集号は年一回ということも、紀要内容の充実と会員の研究発表のためにあまりにも回数が多くということになっていないのではないだろうか、これらはいずれは学会の収入・支出の予算といかに関係づけたいだろうか。非会員の紀要購入による収入は学会の重要収入源であるから、その価値は非会員にも認められているが、学会誌を非会員に購読されるまでに内容を充実するには大きな努力を必要とするだろう。会報と紀要の問題は歴史地理学会が真剣にとりくんで、会員諸氏の御協力のもとに解決されることを期待して、会報第一〇〇号の発行においてこれらの問題の重要性を提案する次第である。歴史地理学会会報は学会誌として成長するには、いくつもの山坂を越えなければならぬだろうが、やがてはこのことも実現することを願いながら、会報第一〇〇号までの過去をふりかえって、多くの方々の御努力に感謝する次第である。

(会長 Ⅱ 筑波大学歴史・人類学系教授)